富山市総合計画審議会
第 2 回 潤 い 部 会

会 議 資 料

平成 1 7 年 1 1 月

富山市企画管理部
企 画 調 整 課

潤い部会要旨

【都市と自然の共生に関すること】

合併により、市域の中に、海や山など、直接自然を体験できる場所ができたことから、都市の公園については、一律に整備するのではなく、その機能について見直しが必要。

合併により、森林等、緑の面積が大幅に増加しているが、数値上の面積が増加しても、緑が増えた実感は湧かない。都心地区には、大きな「緑の空間」が必要である。

市街化区域の見直しが必要であると思う。富山地域から、婦中地域、大山地域への人口移動が進んでいるが、周辺地区の乱開発がおきないように、また、地価の高騰により市民の住宅取得が困難になることがないように工夫が必要。

この部会のテーマでもあるが、「都市」と「自然」をどのレベルで調和させるのか。それぞれの地域の特性に応じて、特化させるべきか。すべての地域で均一なサービスが享受できるまちづくりを進めるのか。いずれにすべきかをはっきりさせるだけでも意義がある。

都市に魅力がないと潤わない。中心市街地に核となる施設の設置が必要なのではないか。市には魅力ある企業・個店の誘致に努めて欲しい。また、統合校の跡地には、駐車場を整備するなど、車でのアクセス向上に努めるべきである。

各地域の特性を明確に打ち出し、海、山、農村など、それぞれの生活スタイルのイメージを共通化する必要があるのではないか。

合併後の富山市でも、中心部を都市空間として整備していくのか。この点について、計画に明確に位置付けることは、非常に大きな意義を持つ。この方針を軸に、各地域の特性・個性を際立たせていくことが必要。

農村部の市民の「都市部と同じような生活をしたい」という要望に応えるために、都市と同様なインフラ整備を実施することは、困難であるが、都心部へのアクセス性の向上、都市への住み替えやすさ、情報通信基盤の整備による情報の共有化等により、そのハードルを下げて、都市の生活に近づけることは可能。

車が運転できる間は、農村部や中山間地域でも生活できるが、運転ができなくなったときには、都市部への住み替えが容易にできる仕組みを望む。団塊世代が高齢期を迎える頃であり、これらの需要が高いと思われる。

【中山間地の振興に関すること】

市民生活において、最も経済的負担を強いられているのは住宅である。地元の風土に適した地域材を使用することにより、住宅の耐用年数を伸ばし、市民の経済的負担の軽減を図るべきであり、地域材の利用促進が必要である。

山村の過疎による山林の荒廃が著しいことから、災害対策の観点からも、山林の整備が必要である。

「市民が安心して暮らせる社会の実現」のためにも、森林整備を重点化すべき施策とすべきである。

農地は開発等により、虫食い状態になっていることや、食料自給率が低いこと等からも、これ以上、中山間地域の農地を荒廃させないようにしなければならない。

【コンパクトなまちづくりに関すること】

都心居住の必要性を感じている人は必ずいるのだから、住まい方の選択肢として、都心居住の推進は必要である。また、そのための仕掛けづくりが必要である。

コンパクトなまちづくりについては、具体的なイメージを提示しないと非常にわかりにくい。

コンパクトなまちづくりは、中心部に限ったものではなく、高齢化が著しい農村部や中山間地域でこそ、身近な地域で生活できるように考えていかなければならず、都市におけるあり方、農村部などでのあり方についての記載が必要。

都市と農村のメリハリをつけないとコンパクトなまちの実現は難しい。

【公共交通等に関すること】

合併前の旧村の総合計画とこの部会の検討事項を見比べたときに、部会の検討事項としては、これで適当ではないかと思うが、『公共交通機関の整備』の記述が必要。

旧富山市を中心に、各地域へ放射線状に道路整備を進めていく必要がある。周辺地域から、中心部への流入を図り、中心地区の「潤い」を高めていくことが重要である。

【その他全体に関すること】

「潤いを実感できる」何か具体的な提示、市民が潤いを感じられる、また「こうなりたい」と思わせる何かが必要である。

評価指標の数値だけでは表せない部分をどう捉えていくかが問題である。市民意識調査の結果でも、活動指標とは相反する市民意識が表れている項目がある。

「住みごこち」に満足している市民の割合は非常に高く、また「住み続けたい」と感じている市民の割合も高い。これは、富山の住環境のレベルが非常に高いことを意味しているが、反面、市民の満足度の目指すべきハードルが非常に高くなってきており、必ず不満の部分が現れてくる。

戦後からこれまで続けられてきたまちづくりを改め、抜本的な計画の見直しが必要。

市民が実感できることが重要であることから、『潤いのあるまちの創造』を『潤いを実感できるまちの創造』に改めれば、わかりやすくなる。さらに、個別テーマについても、「実感できる」を加えたほうが、よりわかりやすくなる。

自分が行きたいと思った時、欲しいと思った時等、それを実現するための選択肢が用意されている状態。各々が求めているものが、「満たされる」、「充足される」状態が「潤い」である。

この部会の検討事項の内容を見ていると、富山市中心部から周辺部を眺めているように見える。

それぞれの「潤い」の捉え方が違うことから、なかなか議論が噛み合わない部分がある。「潤い」に対する大枠・中枠・具体イメージなど共通認識を決めて議論する必要があるのではないか。

人それぞれの「潤い感」があるが、最低限の共有イメージとしては、「市民の多様性を認めながら、それぞれの市民が満足を感じられる。」状態であると考え、整理できる。

指標等により数値による実績判断が進むと、数の多いところだけに、整備が集中してしまうのではないか。

何事にも多数派と少数派が存在するが、少数派の意見を無視して物事を進めることはできないが、数の論理が働くことは、ある程度はやむを得ないのではないか。

地域の声を届け、必要な整備を推進していくためにも、総合計画に位置付けていくことが大前提となる。